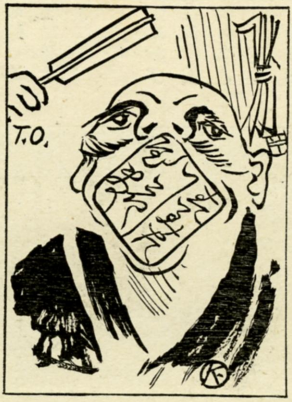
百花園の一日

（水繪寫生會の記）　四　丁

隅田の花に背くことゝに十年。小蒸汽を小松島に乘捨つれば、青田越しなる白髯の森、昔ながらに、こんもりと茂りて、お久振りぞとわれ等を迎ひ顏也。急き候程に既やゝは百花園とぞ小聲に口吟めるは眞野默念子、續いて大下汀鷺子、加藤珂亭子、山田白紅子ぞろ〳〵と園內に進みて、とある阿屋へと行けば、先着の越本米水子、小林華秋子等既に大きやかなる寫生箱を開きて、花など寫し居ける也。いざ約束の蓮をと、花草の小徑を辿り行けば、袴着けざる庇髮の孃さん二人、手帳に色鉛筆持ちたる、歌もや案ずるならんか、更に進めばこゝにも若き男の立ちながらに何やらのスケッチ、池の畔に出づれば、蓮の浮葉のおちこちに、圓葉のちらりほらりと立ちたる、紅き莟さへ二ツ三ツ。對岸の茂り闇く、充分に繪となる好位置とて、己がじゝ三脚を据えける。われは百花園と聞きて態と三脚持參せねば、何か腰掛をと望めば、陶製のもの二ツを持來りぬ。されば一ツに箱を据え、他を横に倒して腰掛けつ、それも繪になるとは彼方の汀鷺子が笑ひながらにいふなりけり。さて鉛筆の輪廓了りて繪具を塗らんとすれば、華秋子寫生箱に損所の出來し、そこゝゝと何をか探し廻はるを聞けば不自由な處ぞ小石一ツなしとて嘯きつ、果ては金槌借來りて頻りにかち〳〵。

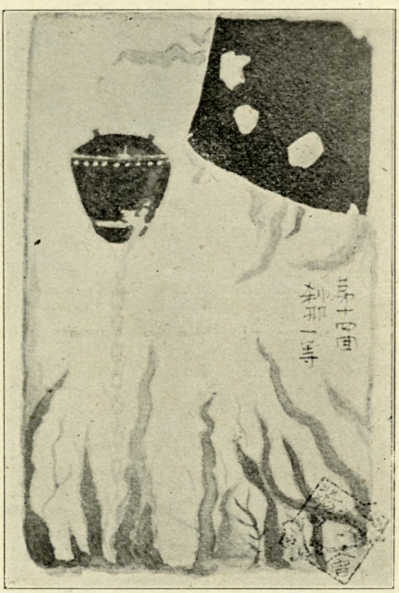


さすがに土用の事とて、日光のぢり〳〵と照つきて、其暑さいふばかりなく、暑い〳〵を續けざまに訴ふれば、中に小意地の惡き人ありて暑きといはゞ五錢の罰金を課すべしとの發議成立ちぬ。さても其後ひどく其何てすなどばかりにて、どうも涼しくない等繰返し居けるが、此方の米水子照附けし寫生箱に手を觸れて、思はず熱ッと叫べば、それ〳〵罰金。

頓て賴置きし辨當の來れるを潮として、難題の寫生を止めて、彼方の家へと引上げの、澁茶に咽を露ふしつ、井の辨當さらりと平らげてあゝ涼しくない〳〵

隣席の人々語合ひけるは、あちらでは顏を洗へば罰金ぞと。蓋し此時われの顏洗ひながら、暑いと口滑らしてそれ罰金といふを聞きしなるべし。默念子これを聞きて、それは違つてゐる、暑いッと無意識に口走りしに心附き、急に口を塞ぎしも後の祭、それ罰金と動搖めくなりけり。折しも……珂亭子何れよりか歸來りて、あつ〳〵〳〵とダブりけるを、またしても罰金。こりや堪まらぬ、早く罰金を徵集して菓子など買はんといふに、しやうことなしに出し合ふたる大枚五十錢。それからは暑くもなきに續けざまに、暑い〳〵。

暫時は已がじゝ繪の補綴などして、いよ〳〵交換繪葉書製造にとかゝりぬ。第一にこゝの判を押してよと賴めば、種々の形のもの、終には烙印に朱肉して押したるまでありける。愈これを利用して繪とすれば、漸々に寄せ書してなか〳〵に興あるもの得出來ぬ。先に隣席にありける、とぼけ面の鼻鹿二人、大變だ〳〵と入來り、何卒拜見さして被〇下といふなりけり。いやこれは面白い。な、なる程、おつてけすな。これを一枚頂戴い出來ますまいか。あげても可いが、一席やり給へ、何れ技術の交換だ。いやそれは痛入りました、御尤樣で。時しも用紙の眞中に角印を菱形に押したるを、小林子靑面の坊主が大口開きし體に描きければいやこれは面白い。そこへ汀鷺子、扇子をもて額を打たんとする樣に書添へける。いやすぐあゝやられる、恐入りましたな。かくて繪を乞はん白扇だに持たざる彼等は、とんだ御邪魔樣をと、元の座敷へと引下りぬ。二人共に何れは御ひいき樣の取巻きとはいはでもの事なるべし。これよそれよと描き〳〵てこゝに三十餘枚。中にも傑作とすべきは、淺草觀音、元錄の面影ハイカラ、晩歸、百花園等なりき。折しも取寄せし言問の蒸菓子來りぬ。今日は案外にも甘黨の跋扈。上ごのわれの殆ど閉口、口惜しさに二ッ許を亡しぬ。小林子とある菓子を笠と見立てゝ、畵紙に載せ、雀躍りを描きたる、面白さに宿の主に贈りつ。やがて夕日の西に傾けば、興は盡きれどこゝを立出でゝ、小松島の畔に行き、隅田の堤の森淡きわたり、前景に船二三艘ある處に、六人づゝりと三脚を並べぬ。こゝに到りて三脚持たぬわれの悲しさ、地上に布呂敷布きて箱を開ける樣の、宛らに雪蹈直しの格なるも可笑しかり。繪筆を走らすること三四十分、繪のあらましに仕上がれる頃は手元やゝ暗くなりければ、まづは寫生箱を閉ぢて家路へとは向ひぬ。汽船中にて、華秋子の曰く、あんな催しならばいつでもお知らせください。どんな都合をしても參ります。今日の會合の什麼に興深かゝりしやは、



これにても知らるべくなん。

（完）

さら〳〵と蓮動かす池の龜　鬼貫

涼風やあちら向きたる亂れ髮　同